宇美公園忠霊塔戦没者芳名碑除幕式　町長式辞

本日ここに宇美公園忠霊塔戦没者芳名碑除幕式を執り行うにあたり、ご臨席賜りました皆様に心より御礼申し上げます。

熾烈を極めた先の大戦が終わりを告げて８０年というこの節目に、宇美町遺族会をはじめ、関係各位のご協力のもと、忠霊塔を整備して芳名碑を建立できましたことを心から嬉しく思うとともに、改めて戦争の悲惨さと平和の尊さを後世に伝え、その惨禍（さんか）を二度と繰り返さないという決意をここに表明するものであります。

しかし世界を見てみますと私たちの思いとは裏腹に、武力や軍事的威圧を用いて、国際秩序や領土の境界を強引に変更し既成事実化する「力による一方的な現状変更」が横行しています。

ウクライナ侵攻や東・南シナ海での海洋進出、そして今回のアメリカとイスラエルによるイランへの攻撃。

８０年にわたり守り続けてきた既存の規範を覆す動きに対し、私たちは「いかなる地域においても許容されない」と強く反対する必要があると思っています。

少し前の映画ですが、皆さんは「硫黄島からの手紙」という映画を存知でしょうか。太平洋戦争の末期、小笠原諸島の硫黄島（いおうとう）で日本軍とアメリカ軍の間で繰り広げられた最も悲劇的といわれる戦いを描いた映画です。

この戦いで日本軍が 20,933 名の守備兵力のうち 20,129 名が戦死し、アメリカ軍は 6,821 名が戦死、戦傷者は 21,865 名にのぼったと言われています。

映画は、終戦から６０年ほど経った硫黄島で、地中から発見された

数百通もの手紙の場面から始まります。それはこの島で戦った兵士たちが、家族に宛てて書き残したものでした。届くことのなかった手紙に、彼らは何を託したのでしょうか。

戦況が悪化の一途をたどる昭和 19 年 6 月、渡辺謙演じる指揮官、陸軍中将の栗林忠道(くりばやしただみち)が硫黄島に降り立ちます。栗林中将はアメリカ留学の経験を持つことからアメリカとの戦いの厳しさを誰よりも知り尽くしていた人でした。

着任早々、長年続いた場当たり的な作戦を変更し、部下に対する理不尽な体罰をも戒(いましめ)た栗林中将に、兵士たちは驚きの目を向けます。今までの指揮官とまったく違う栗林中将との出会いは、愛する妻とまだ見ぬ子どもを残して召集され、硫黄島での日々に絶望を感じていたアイドルグループ嵐の二宮和也演じる西郷二等兵に新たな希望を抱かせます。

そんな中、昭和 20 年 2 月 19 日、ついにアメリカ軍が上陸を開始します。その圧倒的な兵力の前に 5 日で終わるだろうと言われた硫黄島の戦いは、36 日間にもおよぶ歴史的な激戦となりました。

戦死することが名誉とされた時代にあって、栗林中将は兵士たちに「死ぬな」と命じました。

「最後の最後まで生き延びて、本土にいる家族のために、一日でも長くこの島を守り抜け」と。

栗林中将に反発し、軍人らしく玉砕を貫こうとする者や、憲兵隊のエリートから一転、過酷な戦地へと送り込まれた者、そして、まだ見ぬ我が子を胸に抱くため、どんなことをしても生きて帰ると妻に誓った西郷二等兵、そして彼らを率いた栗林中将もまた、軍人である前

に、家族思いの夫であり、子煩悩な父であったことが手紙の文面から伝わってきます。

当時、多くの若者が兵士として召集され、その多くが尊い命を落としました。戦争で国のために殉じることが美徳とされた時代でしたが、兵士の心の奥底には、国のために戦うと言うよりも、これまで自分を育ててくれた両親や愛する妻や子どもを守りたいという気持ちが死を覚悟させ、戦地へ向かわせたのではないでしょうか。

わずか８０年ほど前の出来事です。

本日除幕する芳名碑には、祖国の安寧と家族の無事を願いつつ、命をかけて散華された 451 名のお名前が刻まれています。

その一つ一つに、かけがえのない人生と家族への深い愛情があったと拝察いたします。

ご遺族の皆様におかれましては、最愛の肉親を亡くされ、幾多の深い悲しみと苦難を耐えて、今日を迎えられていることと存じます。

今日、戦後生まれが九割近くを占め、次第にその記憶の風化が危惧されている中で、この忠霊塔は恒久平和を学び続けるための大切な礎となるものであり、この宇美公園全体が、平和を願うすべての人々の心のよりどころとなるよう、次の世代へ繋いでまいります。

結びになりますが、本忠霊塔の整備、芳名碑の建立にご尽力賜りました関係各位に深く感謝申し上げますとともに、戦没者の御霊が安らかならんことを心よりお祈り申し上げ、私のあいさつといたします。

令和８年３月１７日　　宇美町長　安川　茂伸